

(七) 炎かきろひ

一昔前まで、各地の王は己の権力を誇示するかのように、皆競って大きな墳墓を造営した。だが、一般庶民の遺体は山や海に埋められたり、捨てられたりするものが常であった。飛鳥の東の初瀬の山もそんな死者の葬りの山である。その、死者の靈魂の宿る山を越えると、そこは、宇陀うだの阿騎野あきの。この世の冥界でもある。

その冥界へ向かって、草壁の遺児軽王の一行が朝から初瀬の山を登っている。杉や檜の巨木が行く手を阻む。寒々とした裸木の間を縫って、大岩や木の根に足を取られながら少しずつ山道を進んで行く。佐留の年ではこの山道はかなりこたえる。阿騎野に着いたのはもう夕暮れだった。一行を迎えたのは一面の枯れ薄である。その枯れ薄の上に雪が降ってきた。

『人麻呂』は歌う。

やすみししわご大王おほきみ 高照らす日の皇子

神ながら神さびせすと 太敷ふとかす京みやこを置きて

隠口こもりくの泊瀬はっせの山は 真木まき立つ荒山道あらいやまみちを

石いはが根禁樹ねんぎんじゆおしなべ 坂鳥さかどりの朝越えまして

玉かぎる夕さりくれば み雪降る阿騎あきの大野おほののに

旗薄はたすきしの小竹こたけをおしなべ 草枕旅宿くさまくらりせず

古思こしひ

(41)

冬至である。一年で最も昼の短い日。人々は、この日、日輪は死んで再び蘇ると考えた。日の大神の天の岩戸伝説は冬至の神話化とも日食の神話化とも言われている。神話の時代はともあれ、昔大海人は吉野から宇陀を通じて

日本国の大王になった。そして草壁もこの宇陀に籠って、日並斯皇子ひなみしのみことなった。日並斯皇子とは、日の神の御子である大海人に並ぶ皇子という意味である。宇陀の阿騎野に籠ることは死であり、そこから出ることは再生を意味するということ。しかも靈魂の加護を受け、より強い力を得て蘇るのである。

今、軽もまた冬至の一夜を阿騎野に籠って草壁を偲ぶことで、父草壁と一体になろうとしている。

阿騎の野に宿る旅人

打ち靡き眠も寝らめやも古思ふに (46)

ま草刈る荒野にはあれど

黄葉の過ぎにし君が形見とそ来し (47)

やがて夜明け。薄明かりの中に東の野がほのかに浮かび上がってくる。

東の野に炎の立つ見えて

かへり見すれば月傾きぬ (48)

草壁が狩をした時刻である。

日並斯皇子の命の馬並めて

御獵立たし時は来向ふ (49)

草壁の霊と一体となった軽の狩りが始まった。馬を走らせる軽の頬が冷気の中で赤く染まる。普段はおとなしい軽の眼が生き生きと輝く。勢子に追い立てられた兎を見つけると、馬を駆けさせながら短い弓を引いた。兎は逃げる。一矢、二矢、三矢。弓矢には自信のある軽ではあるが、逃げる兎も必死である。やがて兎は林の中に姿を消した。悔しがる軽。これは軽王の成人の儀式である。軽は十歳になっていた。

「軽王の成人の儀、滞りなく相済みました。」

高市が菟野に報告する。菟野は即位以来、高市を太政大臣に任じて実務を任せている。高市は壬申の乱最大の功労者であり、浄御原宮大王の皇子の中では最年長でもある。その高市を臣下である太政大臣に任命することで、他の皇子の王位を狙う野望を抑えているのである。

「ご苦労でした。ところで、夕べ軽王は阿騎野で草壁皇子の霊と一体になりました。ですから、これからは軽皇子と呼びますように。」

菟野は抑揚のない声で高市に命じた。

「軽王を皇子に。」

高市の表情が曇った。菟野は眉毛ひとつ動かさずに傲然と高市を見据えている。重苦しい沈黙が流れた

「皇子になられれば、日継に立つこともできるわけですな。」

高市は菟野の表情を探るように尋ねる。

「皇子は他にも大勢おります。異議を唱える者もおりましょう。」

「そなたも反対ですか。」

高市は苦笑した。疑われては叶わない。

「私のもとより立場を弁えているつもりです。しかし、中には皇女腹の皇子もおりますから。」

「長と弓削のことですか。」

「長皇子も弓削皇子も来年は二十一歳です。舎人皇子も十九歳になります。」

「長と弓削には官位を与えましょう。」

「長皇子はおとなしいからそれでもよいでしょうが、弓削皇子はおさまりませうまい。」

「ではどうせよと申すのですか。」

「高市はしばらくためらった。草壁の死以来、日継のことは高市なりに考えていることがある。だが、今、菟野にそれを言ったものかどうか。」

「氷高女王はおいくつになられました。」

氷高は軽の姉である。

「ああ、氷高。氷高を弓削にやれというのですか。」

「お似合いと存じますが。」

「考えて見ましょう。」

一人になると菟野は庭に出た。凍てつくような北風を身体一杯に受け止めて立っていると、頭の芯から冴え渡ってくる。

「阿閉を呼びなさい。」

草壁の死から三年、阿閉も三十二歳になった。二年前の紀伊行幸に同行した時には、紀ノ川を挟んで対峙する妹背山を見て涙が止まらなかった。

これやこの大和にしては我が恋ふる

紀路きぢにありとふ名に負おふ背せの山

(35)

過大な期待に押し潰された頼りない男だったが、阿閉にとっては唯一た一人の子煩悩で優しい夫だった。菟野を恨んだこともある。だが三年という年月と、三人の子供たちの笑顔が、心の奥底に秘めた恨みをも少しずつ風化させようとしている。一時は張りを失っていた顎も、また昔のふくよかさを取り戻しつつある。

「軽の成人の儀、滞りなく行われたとの事、祝着です。」

菟野の声はいつもどおり重々しい。

「有り難う存じます。」

阿閉はゆつたりと礼を述べる。

「でも、軽はまだ十歳。成人というには余りにも幼くて痛々しゅうございませう。」

早すぎる成人の儀に、阿閉の顔色はいまひとつ冴えない。成人は普通二十一歳である。菟野は笑った。

「いつまでも子供だと思って。すぐに大きゅうなりませう。ところで、夕

べ、軽は阿騎野で草壁の霊と一体になりました。それゆえ今日よりは、軽王ではなく、軽皇子と呼ぶことにしました。」

「軽皇子。」

阿閉は首を傾げてしばらく考えていたが、やがて恐る恐る切り出した。

「日嗣のことでございますが、先の大王の皇子が大勢おられますから、軽に順番が回ってくることはまずあるまいと存じておりました。でも、皇子になるということは、軽が日嗣になるかもしれないと考えてよろしいのでございますか。」

「何時その日がきても良いように、心して育てなさい。」

阿閉には、姉でもあるこの姑の依怙地なまでの執着ぶりが理解できない。大王的の位に拘らねば草壁も死なずにすんだであろうに。阿閉の脳裏に、大津の夢に怯えていた夫の姿が浮かぶ。胸の奥底に抑え込んだ恨みが頭をもたげる。軽には夫の二の舞をさせたくない。

「お言葉ではございますが、」

阿閉は消え入るような声で、眼を伏せた。

「軽は皇子様に似て、線の細い子でございます。軽に大王が務まりまじょうか。」

もちろん菟野には、妹でもあるこの嫁の心配がよくわかつている。神経を病んで早世した草壁に似て、軽もまた繊細な心と身体の若者である。

「皇子様が亡くなられたのは、大津皇子の崇りと存じます。もし、軽が大王になぞなりましたら、あの子もまた崇られるのではないでしようか。」

菟野の眉がピクリと動いた。

(やはり阿閉も大津を殺したのは私だと思っている。)

だが、大王に弁解は無用である。菟野は静かに続けた。

「血を流したのは大津だけではありません。この飛鳥の地は余りに多くの血を吸いすぎました。軽のために新しい都造りを急がせまじょう。それから、大津のためには寺を建てまじょう。だから何も心配することはありません。」

菟野は気を引き立てるように話題を変えた。

「ところで、軽も成人したからには何時までも母のそばに置くわけにはいきまじょう。妻を持たねばなりませんね。紀皇女きのひめみこを娶めあわせまじょう。」

「紀皇女でございますか。ずいぶん年上でございますね。」

「軽はまだ幼いから、母親代わりになるでしよう。明るく華やかな娘ですから軽も元気になりますよ。ついでにといいは何ですが、氷高も来年は十四歳。弓削皇子に娶わせまじょう。」

「氷高を弓削皇子にでございますか。」

突然の縁談に、阿閉は驚いた。

「不服ですか。」

「いえ。ただ、急に。寂しくなります。」

阿閉の声はますます小さくなる。

「そなたにはまだ吉備がいるではありませんか。これは高市の進言です。私も良い縁談だと思います。」
阿閉に断ることはできない。

「ありがとうございます。」

深々と拝礼して部屋を辞した阿閉の硬い笑みを思い出して、ひそかな愉悅に浸っていた菟野は、軽い不安を覚えて我に返った。高市はなぜ弓削と氷高の縁談を勧めたのだろうか。誰もわかってくれない苛立ちから、ついうっかり高市の口車に乗せられてしまった。もしこのことで弓削がつまりない野望を抱くようになったら。これはとんでもない間違いだったのではないか。

年が明けて、正月は昇進の季節である。軽王の皇子昇格と引き換えのように、高市に浄広一、長と弓削に浄広二の位が与えられた。軽と紀、弓削と氷高の婚礼も執り行われ、宮中は久しぶりに華やかな空気で満たされた。佐留も阿騎野の歌が軽の皇子昇格に貢献したことを認められて更に昇進した。

はくすのえ
白村江の敗戦から三十年。壬申の乱からも二十年。人々の戦争の記憶も薄れた。菟野は相変わらず吉野行きを繰り返し、実務は高市以下、阿倍御主人や大伴御行に任せられ、表面上は平穏な日々が続いている。

新都は藤原の地に決まり、労役に駆り出された人々が、巷に溢れた。大伴家の三兄弟も時々様子を見てやって来る。旅人や田主にとっても、幼い頃の戦いの記憶はほとんど残っていない。ただ、旅人には戦の前夜に別れたきりの、母の白魚のような手のぬくもりと甘酸っぱいほのかな香りを忘れることができない。戦の後、流罪となった祖父巨勢比等に従った母郎女は慣れぬ北の地で果てたとも聞かされている。

今では大伴氏が誇っていた武力も朝廷の直接統括するところとなった。だが、名門に生まれ育ったこの若い貴公子たちには、追いつめられた己の運命を自らの手で切り開こうというあくどさがない。歌を詠んで一族の宿命を嘆きながらも、武者の父安麻呂のように熱く燃えることもできないでいる。

この頃、『人麻呂』の歌をまねて、こんな歌が流行った。

大君は神にしませば

水鳥のすだく水沼みぬまを都になしつ (4260)

安麻呂の兄御行までもが、興に乗って替え歌を作った。

大君は神にしませば

赤駒の腹這はらばふ田はらあを都になしつ (4261)

新都は畝傍、耳成、香具山に囲まれて、中央を飛鳥川が流れる。夏になると葦や真菰に混じって丈の低い庭藤が一面に薄紫の花房をつけるところから、「藤原」と呼ばれた土地である。いつの頃からかその一隅に鎌足が住み着いた。薨去前夜に近江宮大王から「藤原」の名を賜ったのはその土地の名に由

来する。この地に新都を持って来ようと言うのである。不比等の新都造営にかける意欲は、並々ならぬものがある。

菟野もまた、たびたび現場作業を視察した。大掛かりな土木工事を好んだ祖母宝の血が、紛れもなく菟野の体内にも流れている。すべてが順調に運んでいた。活気に満ちた人夫の仕事ぶりを見るのは楽しいものである。見に行く度に建物が増え、都が少しずつその姿を現してくる。唐の都長安を真似た本格的な都である。視察の帰りには、必ず薬師寺に参詣した。畝傍山の東の麓に立つこの寺は、今や新都の西京の中心になりつつある。

うらかな春の一日。のどかな鶯の声に誘われて、思い立つままに、わずかな舎人を連れただけで輿に乗った。芽吹いたばかりの柔らかな緑の中で、菟野は浮き立つような充実感に浸っていた。香具山の西の麓まで来た時、急に気が変わった。

「香具山に登りましょう。きっと都がよく見えるでしょう。」

舎人たちのために菟野は気がつかない。数人の舎人が慌てて先へ走った。

菟野を乗せた輿はゆっくりと山道を登って行く。中程まで登った時、また舎人が走る。前の舎人を手伝って、木切れで何かを動かしている。輿が止まった。

「あれは何をしているのか。」

菟野の問いに舎人は地に伏して畏まる。

「お眼を汚してはなりませんので。」

後は口ごもって答えにならない。

(そうだったのか。)

合点が行った。おそらくは死人であろう。いつもはあらかじめ行幸を知らせているから、汚らわしいものは事前に片付けているのだろう。知らなかった。今まで何を見ていたのだろうか。

「構わぬ。輿を進めなさい。」

「ははっ。」

返事だけで舎人は一向に動こうとしない。

「もうよい。歩きます。」

「そればかりは、なにとぞ。」

やむなく輿は動き出した。近づくにつれて、強烈な臭いが鼻を突く。腹の底から突き上げるような吐き気をこらえて菟野は黒い塊を凝視した。肉が崩れ落ちて骨がむき出しになっている。あの白い塊は何だろうか。いや、塊ではない。

もぞもぞと蠢いている。蛆だ。見たのはそこまだった。腹の底

から酸っぱいどろりとした塊が突き上げて、口中に溢れた。吐き出そうと眼をそらして、ギョツとした。木陰から二つの眼がじっとこちらを見つめている。いや、二つだけではない。そこにも、ここにも。草の陰、木の陰に潜む無数の眼が、菟野一人に注がれている。おそらく、舎人共に追い払われた民

であろう。鳥肌が立った。

(菟野よ。しっかりせよ。大王たるもの死人を見て人前で吐いたりしてなるものか。)

菟野は口中のどろりと苦く酸っぱい塊を、少しずつ、少しずつ、呑み込んだ。喉がヒリヒリと痛む。

「進みなさい。」

昂然と言い放つと、背筋を伸ばして前方を真っ直ぐに見据えた。

(見るのではなかった。)

悔いが残った。だが、これが現実だ。為政者たるもの、現実から目を背けてはならぬ。病気だったのだろうか。新都造営に駆り出された人夫かも知れない。過酷な労働に追い立てられる人夫たちの怨嗟の声が聞こえるような気がした。

新都は人心を一新する。清新の気の溢れた都では、戦を知らない若者たちが、恋の季節を迎えていた。恋にもいろいろ。身を滅ぼすような情熱的な恋もあれば、保身のための打算的な恋もある。但馬皇女たじまのみめみが前者の代表なら、舍人皇子は後者の代表か。

浄御原宮大王の娘但馬皇女は長兄高市皇子の妻となった。だが高市には御名部いなかみというれつきとした妻がいる。厳しく父娘いなかみほども年の違う高市よりも、

若い但馬は美々しく雅やかな穂積皇子ほづみのみこに恋焦がれる。穂積に会いたい一心で高市の宮を抜け出して朝霧のかかる川を渡ったこともある。風流を好む穂積はそんな但馬の熱情をかえって持て余しているかのようにも見える。

但馬と違って舍人は賢い。幼い頃から権謀渦巻く宮廷を泳ぎ渡る術を身に付けてきた。権力者菟野の行幸には必ず供奉する。

春の吉野は一面柔らかな新緑に霞む。霞の中で山桜が淡い彩を添えている。鶯が谷を渡る。浮き立つような春の舟遊び。心地よい春風に煽られて舍人は杯を重ねる。これが飲まずにいられようか。舍人が密かに想いを寄せていた紀皇女が、菟野のお声がかかりで軽皇子の妃になってしまったのだ。諦めねばならぬ。そして、諦めたことを、菟野に知らせておかねばこの身が危ない。宴が終わって船を降りようとした。

ぐらり。

船が揺れたか、体が揺れたか。思わず手を出した女官の足元に何かが落ちた。小さく折った結び文。

「皇子様、何か落ちました。」

女官の呼びかけにも気がつかず、舍人は船を降りて行ってしまふ。

「困ったこと。どうしましょう。」

結び文を手を取って困惑する女官に声をかけたのは不比等。

「どうしました。」

にこやかな不比等の明るい笑顔についつられて、女官は結び文を差し出した。

「舎人皇子様の落し物ですな。後でお返ししておきましょう。」

舎人の結び文はそのまま菟野の手に渡った。

大夫や片恋ひせむと嘆けども

鬼の大夫なほ恋ひにけり

(117)

菟野の侍女結子に宛てた恋歌である。ほのかな甘い香りに包まれた春の吉野。

菟野もまた、おのずとおおらかな気分になる。

「恋文を落とすとは粗忽者じやの。」

不比等も笑って答える。

「さあ、それはどうでしょうか。賢いお方ですから。大王のお目に止まるようにわざと落とされたのかもしれない。」

菟野にはわからない。

「実は皇子様は紀皇女様にお心を寄せておられましたよ。この事を知っている者は結構おります。ところが皇女様が軽皇子様のお妃になりましたから、疑われることを恐れられたのではありますまいか。」

「紀を諦めたことを知らせるためにわざと落とされたというわけですか。それは可哀想なことをしましたね。では、不足ですが、代わりに結子を与えましょう。」

菟野の侍女の中でも際立って美しく聡明な結子である。他人の身代わりなど結子の自尊心が許さない。もともと結子の方は保身に汲々としている舎人より、泰然自若とした長皇子に心惹かれている。だが菟野の命令である。どうして断ることができようか。舎人に連れられて歌人の集まりに顔を出すようになった結子は、長の姿を見る度に、心ときめきを覚えずにはいられない。若者たちの紡ぐ恋の糸は互いに絡み合って複雑な愛憎模様を織り成している。

恋の糸を紡ぐのは若者ばかりとは限らない。欲と欲が絡み合って人知れず結びついた恋もある。世間がこぞって新都造営に沸き返っている頃、軽の乳母の県犬養三千代の夫三野王が、太宰率に任ぜられて、一人ひっそりと都を去って行った。その頃から三千代は時々大宮に娘を連れて来て、軽の相手をさせるようになった。年は軽より三つ四つ上であろうか。年齢以上に落ち着いたそのたおやかな物腰は、どこか妖艶たる趣さえ漂わせている。

そんな中、遷都後のごたごたも一段落して、年老いた菟野がこれまで以上に頻繁に吉野へ出かけて行っても、誰も不思議に思うものはいない。菟野はそこで、誰を相手に、何を考え、何を画策していたのだろうか。